

日本建築規矩術史

日本建築技術史研究に大いに寄与し、
今後の文化財建造物修理や技法調査、
伝統的建築の設計など実務においても必携の書。

大上直樹（大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員）著

本体価格二一、〇〇〇円十税

B5判上製函入 本文四一六頁 挿図二五〇点 ISBN 978-4-8055-0753-7 C3052

規矩術は木割術とともに我が国の主要な建築設計技法のひとつであるが、近世以前の規矩術は古来秘伝とされ、また内容が困難であるため真の技法が解明されたとは言いがたい。今日の文化財建造物修理には、昭和初期に成立した現代軒規矩術によつてなされてきているが、近世以前の技法や納まりを説明することが出来ず、現場において曖昧な説明が繰り返されてきた。本書は、中世・近世の規矩術の変容過程を技術史的立場から解明し、秘伝とされてきた近世以前の規矩術の体系化を初めて試みたものである。今日に常識とされている現代軒規矩術の課題を挙げ、実際の文化財建造物修理において採用された実績のある、著者の知見を示す。

お取り扱いは

中央公論美術出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-10-1
IVYビル6F

Tel: 03-5577-4797 Fax: 03-5577-4798

目次

はしがき

序章 軒規矩術研究の目的と概要

第一編 中世の軒規矩術とその変容過程―留先法―

第一章 隅木を基準とした軒規矩術法と復原事例

第二章 留先法による二軒繁垂木の検証

第三章 留先法による一軒疎垂木・同繁垂木・二軒疎垂木の検証

第四章 留先法による扇垂木の検証

第五章 留先法による八角軒・六角軒の検証

第二編 近世の軒規矩術とその変容過程―引込垂木法―

第六章 『大工雛形秘伝書図解』と類型本による近世軒規矩術

第七章 近世の軒規矩術書と引込垂木

第八章 引込垂木の変容―『独稽古隅矩雛形』と現代軒規矩術法―

第三編 中世から近世にかけてのその他の技法

第九章 隅の軒出と平の軒出の関係について

第一〇章 垂木の勾配の指定方法とその変容

第十一章 茅負の反りの決定方法

第四編 扇垂木の技法

第十二章 鎌倉割と等間割の技法とその関係について

第十三章 立川富房著『軒廻極雛形』の扇垂木について

―要(かなめ)のない扇垂木の技法―

結章 日本建築規矩術史のまとめ

あとがき

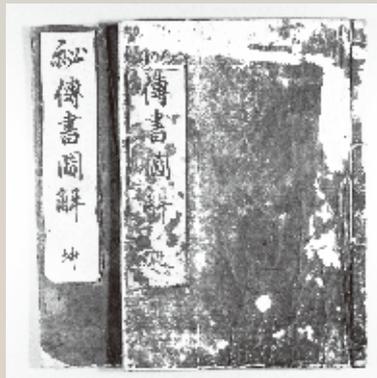
謝辞

掲載論文一覧

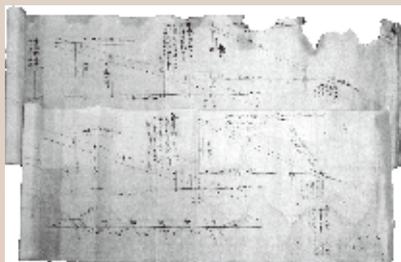
本書をお薦めする方々
日本建築史、住宅建築史、日本中・近世史の研究者・研究室／博物館・郷土資料館・学芸員／各都道府県・市町村教育委員会／宮大工・社寺建設業関係者／寺院関係機関・関係者／大学・公共図書館など

著者略歴

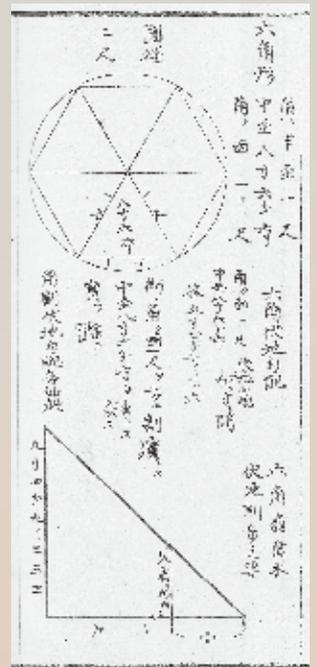
大上直樹(おおうえ・なおき)
大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員 博士(学術)
一級建築士事務所大上建築研究所代表
芝浦工業大学卒業、同大学院修士課程修了
大阪市立大学大学院後期博士課程満期退学
滋賀県教育委員会文化財保護課技師を経て短大、大学等の教員を務める
著書・大工頭中井家建築指図集(分担執筆)、文化財建造物修理工事報告書一〇冊、近世社寺建築調査報告書三冊その他



『大工雛形秘伝書図解』乾・坤



坂上家文書



『規矩真術』の六角扇垂木等間割の定め方

関連書籍

木割表現論

山岸吉弘 著

建築を文字と数字で表す「木割」から、建築にまつわるあらゆる要素を記録する「木割書」へ。「王子造り」という建築を主眼点に、多様な原典を辿りながら「木割書」の技術と歴史の世界をより深く追究する意欲的研究。

A5 判上製函入 本文 296 頁 挿図 80 点
ISBN 978-4-8055-0731-5 C3052

きくだきのちゅうもん
木碎之注文

本体価格 22,000 円+税

木碎之注文研究会 編著 中川 武 監修

原本として現存する最古の木割書であり、日本建築技術史上における重要な一級史料の翻刻。影印・釈文篇と解題・現代語訳篇の2分冊を、同書研究会による長年の研究成果を踏まえた解説付きで刊行する我が国の古建築技法書の古典。

A5 判上製函入
2分冊(影印・釈文篇 374 頁 / 解題・現代語訳篇 174 頁) 挿図 254 点
ISBN 978-4-8055-0691-2 C3052